



あるじでえ

No.18

世田谷区教育委員会 民家園係

〒157-0067 世田谷区喜多見5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園

☎ 03(3417)8492

◎ 岡本公園民家園

☎ 03(3709)6959

平成3年12月1日 発行

平成8年5月 増刷

平成28年7月 増刷

続・家^{いえ}に祀^{まつ}られる神々^{かみ がみ}

1. <はじめに>

『『あるじでえNo.13』では、伝統的な日本の家で祀られる神々について解説しました。その中で指摘したように、家の裏側に祀られる神々は家族の私的な生活に深い関わりを持っています。

今回は、家の裏側に祀られる神々の中から荒神と納戸神を取り上げます。そして具体的事例を中心に、これらの神々と人々との関わりについて詳しく見ることにしましょう。

2. <荒神について>

屋内の荒神は、一般的に竈^{かまど}の上方に作られた棚^{たか}で祀られています。ここに祀られる荒神は三宝大荒神・土荒神などと呼ばれ、火の神として信仰されているようです。竈の上以外では、囲炉裏のある部屋に棚を作って祀られたり、自在鉤^{じざいかぎ}や囲炉裏、あるいは五徳^{ごとく}（火鉢や囲炉裏の中央に置き、鉄瓶^{てつびん}や鍋などを乗せる道具）に荒神が宿^{やど}しているとする地域もあります。

その名が示すように、荒神は非常に荒々しく、怒りっぽい神とされていますが、農耕の神や家族の守護神としても信仰されて

います。以下に、荒神の性格を示す具体的な事例をいくつか示してみましょう。

○事例1

「田植えが終わると稲が良くできるように、苗を良く洗って荒神様に供える。」
(長崎県三井楽町)

○事例2

「家人が遠出をする時には荒神様を拝み、帰ったらすぐに無事だったことを荒神様に報告する。」(長崎県平戸市)



写真1：囲炉裏と自在鉤(長崎家)

○事例3

「子供の夜泣きがひどい時には鶏^{ひつじ}の絵を書いた紙を荒神様の神棚に上下さかさまに吊り下げるとよい。」(長崎県平戸市)

あるいは「暗の夜に、鳴かぬからすの声聞けば、生れぬさきの父ぞ恋しきと書いた紙を荒神様の壁に貼っておくと子供の夜泣きが止まる。」(長崎県小値賀町)

○事例4

「年の瀬から正月の間、囲炉裏の火を絶やすと荒神さんが荒れるので暮れには大きな木(大晦日の晩から正月7日まで、囲炉裏で燃やし続ける大きな木のことを鹿児島では『火のトギ』、宮崎では『年太郎』、和歌山では『世継ぎホダ』と呼んでいます)を囲炉裏に焼べて火が絶えないようにした。また漁や山へ行く時、あるいは学校や村の外へ出かける時にも囲炉裏の四隅の荒神さんを拝んで外出した。」(長崎県奈留町)

○事例5

「荒神様のない家でも、病気にかかった時は三宝荒神を祀ると治ると言われている。」(大阪府河内長野市)

○事例6

「荒神様は産の神様であるから、その方に向かって産をするという。」(岡山県備前市)

世田谷の荒神信仰

世田谷区内では、まだ竈があった頃は、その上に荒神様を祀る棚がありました。竈が無くなった現在でも多くの農家では、台



写真2: 五徳

所の隅に棚を作って、荒神様を祀っています。「オコジンサマは火を守ってくれる」とか、「竈の神でサンボウコウジンと呼ぶ」などと伝承されています。

荒神様はその家の子供達の縁談を取り結ぶため、10月30日に山へ旅立ちます。この日荒神様に、「お土産団子」と呼ばれる団子を36個供えるのは、荒神様には36人もの子供がいるからと説明されています。

山へは11月30日に帰って来ます。この日もやはり「お帰り団子」と呼ばれる団子を36個供えることになっています。用賀では団子の代わりに、ボタモチを供えているようです。

留守神

旧暦10月のことを「神無月」と呼ぶことは全国的に知られています。一般的に、村の神々が旧暦9月の晦日に出雲へ旅立ち、旧暦10月の晦日に出雲から帰って来ると言われています。この期間は村の神々が不在となることから、「神無月」と呼ばれているようです。一方、全国の各地から神々が集まる出雲では、この月のことを「神在月」と呼んでいます。

既に述べましたように、世田谷区内では1月遅れの伝承として、荒神様は10月30日に山へ行って、11月30日に帰って来ます。しかし、地域によっては、荒神様は山へ行かずに残るとするところもあります。

家に残る神様のことを「留守神」と言います。留守神としては恵比寿様・大黒様が知られていますが、荒神様も留守神として家に残るとする地域も多いようです。以下に、留守神として家に残る荒神様の事例をいくつか紹介してみましょう。

○事例7

「10月には神様が出雲へ酒づくりに行くが、竈の神様(荒神様)だけは留守をする。」(山口県相島)

○事例8

「神無月の留守神は、竈の神(荒神様)と恵比寿神であるという。竈の神様は36人も子供がいて、子供を連れて行けないので留守番をしているという。」

(群馬県大泉町)

○事例9

「オカマサマ(荒神様)には子供が23人もいて、多すぎて山へは行けないのだという。」(群馬県勢多郡大胡町)

○事例10

「竈神(荒神様)はオカマ36匹などと言われるように、眷族が多くて36匹もの馬に乗ってぞろぞろ出かけるので、『おまえが来ては、騒がしくてかなわないから』と言われたため、遠慮して行かない。」

(福島県石城地方)

3. <納戸神について>

主人夫婦の寝室として使用されていた納戸は家の裏側に位置するため、日中でもうす暗く、表側の座敷や出居とは対照的な居住空間です。この納戸の中に祀られるのが納戸神です。長崎県の対馬ではこの神様のことを「納戸の神様」と呼んでいます。地域によっては歳神・亥の神・恵比寿・大黒・トシトコサンなどと色々な呼称で呼ばれています。

以下に、『あるじでえNo.13』では取り上げなかった納戸神の事例をいくつか紹介しましょう。

○事例11

「納戸の一隅に作られた棚に御歳徳神と書かれたお札を貼り、櫛などを立てる。この棚で祀る神様が納戸神で、女の神であり、田の神と伝えられている。」

(兵庫県)

○事例12

「旧暦2月と11月の丑の日は田の神様の

祭日で、この日に餅を搗いて納戸の神に供える。納戸の神様は納戸の中に作られた棚に祀られていて、大黒様の恰好をしている。納戸の神は2月に納戸から田へ出かけ11月には田から家に帰ってくる。」(長崎県宇久島)

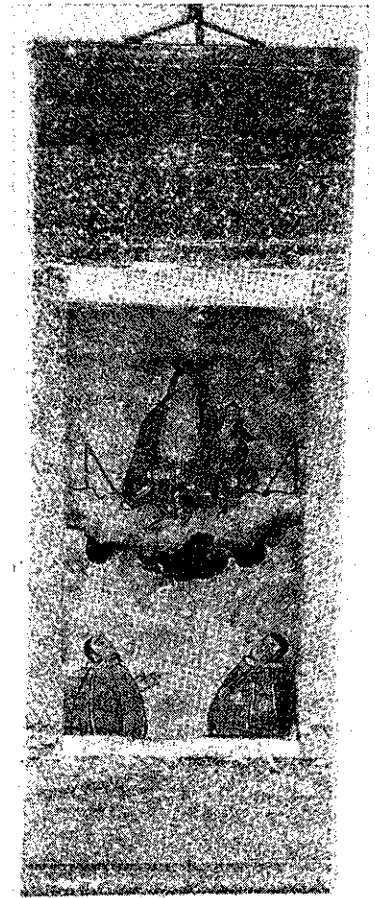


写真3 納戸神(長崎県生月島のマリア様)

○事例13

「福岡県豊前市にある求菩提山(天台系修験道の霊山)の山伏の坊には出産の守り本尊として納戸神が祀られている。」

○事例14

「寝室であるへや(納戸)の隅に棚を吊り、ここにトシトコサンを祀る。家によってはへやに置いてある米びつの上でトシトコサンを祀ることもある。トシトコサンは大黒様で、百姓の神だとか、暗い所を

好まれるなどと伝承されている。」

(島根県隠岐島)

ところで、納戸神として知られているものに、かくれキリシタンが祀るものがあります。次に、このかくれキリシタンの祀る納戸神について紹介します。

かくれキリシタンの納戸神

フランシスコ・ザビエルによって1549年に、キリスト教がわが国に伝えられました。キリスト教信者の数は次第に増えて行きましたが、徳川家康によって1614年にキリシタン禁制が出されてからは、多くの殉教者が出る結果となりました。江戸時代を通じて、キリシタンへの迫害が続けられたことは良く知られています。厳しい迫害の中でキリシタン達は、表面上仏教徒を装いながらも、密にキリスト教への信仰を続けたのです。

明治6年以降、キリシタンへの弾圧が無くなったにもかかわらず、教会へ所属することなく、自分達の信仰を守り続けている人達があります。このような潜伏状態のキリシタンは長崎県に多く存在し、「かくれキリシタン」と呼ばれています(江戸時代に幕府の弾圧を逃れていたキリシタンのことは潜伏キリシタンと呼んで、かくれキリシタンとは区別しています)。

かくれキリシタン達は家の中に仏壇や神棚を設けてはいますが、納戸には「お姿」とか「お神さま」と呼ぶキリストの聖画像やマリア観音などを祀り、崇拝しているのです。こうした崇拝物は納戸に祀られていることから納戸神とも呼ばれています。

4. <おわりに>

伝統的な民家に祀られる家の神の中で、今回は荒神と納戸神を取り上げました。多くの事例で見たように、これらの神々は家

族の私生活(農業・家族の健康・お産・子供の夜泣きなど)に関わっています。そのため屋内の私的居住空間(台所・納戸・土間)に祀られると考えられるのです。このことはかくれキリシタン達が、自分達の神を祀る場所として納戸を選んだことから推察することができます。

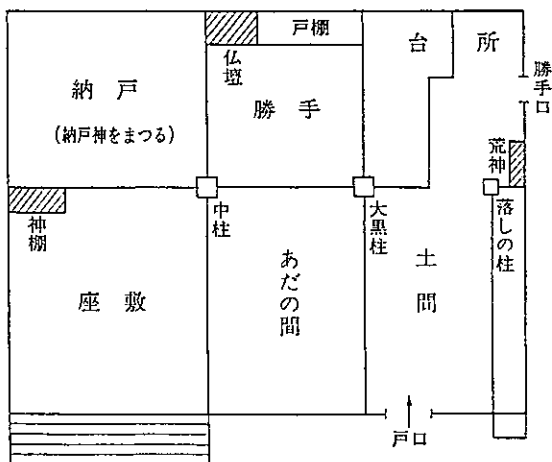


図1 かくれキリシタンの家(長崎県生月島)

現在、農家でも次第に荒神や納戸神あるいは恵比寿・大黒は祀られなくなっています。すなわち、家の表側の神様だけが残って裏側の神様がなくなったこととなります。農作物を作ること無くなり、お産も近代的な病院で行なうようになるなど、家族生活が大きく変わったのですから、こうした家の神の変化も当然のことかも知れません。

以上、私達の先祖の生活の中で家の神がどのような意味を持っていたのかを理解するために、『あるじでえNo.13』に続いて家の神を取り上げて解説しました。

区文化財資料調査員 高見寛孝

※写真3と図1は、片岡弥吉「かくれキリシタン」(評論社刊『近世の地下信仰』昭和49年度版)から転載いたしました。